

## どうなる世界と日本

野瀬 隆平

終わりの見えないロシアとウクライナの争い。ロシアは核兵器の使用をもほのめかしている。これから世界は、日本はどうなっていくのか不安が募る。

ロシアや中国などの専制主義国家が支配する世界になってゆくのだろうか。人間社会は我々が望む良い方向に向かって行くと期待したいが、現実はその逆で残念ながら悪い方向に進むように思える。

ここで思い起こすのは、『1984年』という、ジョージ・オーウェルの近未来小説である。舞台となっているのは、正にこのような恐ろしい専制国家が支配する世界だ。そのような社会で、人々がいかにか非合理的な思想や行動を強いられ、その重圧に耐えているかを描いている。

オーウェルがこのディストピア小説の舞台として描いた1984年には、世界は未だこの様な状況にはなっていなかったが、近年の情勢を見ると正にそうなりつつあるのでは。話しの中には、ある集会で「戦争は平和なり！」とか「無知は力なり！」というお題目を、大きな声で唱えるよう強制され、次第に洗脳されてゆく場面がある。

ところで、1975年に『日本の自殺』と題する論文が、文芸春秋の誌上に発表された。著したのは「グループ九八四」という匿名の集団。名前を上記のオーウェルの作品名からとったのは明らかで、論文の主旨は日本の将来を憂いているものであり、これから衰退に向かうと予言している。それも他からの力によってではなく、内部から崩壊してゆく、いわば「自殺」するようなものだと言っているのだ。

書かれたのが1975年、日本経済に多少の陰りは見え始めたものの、多くの日本人が明るい将来を描いていた時代である。その後日本に起きた出来事をたどって見ると、残念ながら、この厳しい予測が当たりつつあると思えるが危惧であろうか。

オーウェルの小説とこの論文とを、同類のものとして論ずるのは無理かも知れないが、誰しも予想しなかった近い将来のことを予測し、それが現実になっているという点では、同じだと思う。